

ジェームズ一世の「忠誠の誓い」と ロバート・パースنزの『カトリック教徒英国人の判断』

—— ロバート・パースنزのジェームズ一世への反論について ——

高 橋 正 平

序

17世紀前半のジェームズ一世王朝下で特筆すべき事件は、1605年11月5日のカトリック教の過激派ジェズイットによるジェームズ一世の殺害を図った「火薬陰謀事件」であった。これは未遂に終わったが事件後、1607年、ジェームズ一世は「忠誠の誓い」(the Oath of Allegiance)をいわば「踏み台」として国内のカトリック教徒に課し、彼らの忠誠を自らに誓わせることによって王朝の安定を計ろうとした。その結果、この誓いをめぐって王側及びカトリック教側から賛否両論が入り乱れ、この「書物戦争」とも言うべく論争は英国のみならず大陸にまで拡大していくことになる。⁽¹⁾ カトリック教徒にとって「忠誠の誓い」をジェームズ一世に対してたてるか否かはカトリック教を捨てるか否かの信仰に関わる重要な問題であった。この「忠誠の誓い」の2年後の1609年、ロバート・パースنز (Robert Persons) は「忠誠の誓い」を批判した『カトリック教徒英国人の判断』(*The Iudgment of a Catholicke English-man*)を出版する。⁽²⁾ この反論書は単にジェズイットによるものではなく、当時のジェズイットの最大の論客パースنزによって書かれたという事実を考慮にいと簡単には無視出来ない書となってくる。言うなればパースنزの反論書はジェズイット及びカトリック教会側からのジェームズ一世の「忠誠の誓い」への反論を代弁していると考えることができるのである。それ故、本論ではパースنزの『カトリック教徒英国人の判断』をジェームズ一世の『忠誠の誓い弁明』(*An Apologie for the Oath of Allegiance*)⁽³⁾との関係で論じ、いかにしてパースنزが

ジェームズ一世に反論しているのか考察していきたい。パースンズの『カトリック教徒英国人の判断』をジェームズ一世との関係で論ずることはジェームズ一世とローマ・カトリック教会との論争の核心を解明することになる。

1

パースンズの反論書の完全なタイトルは、『宗教のために故国を追放されて生きるカトリック教徒英国人の判断。彼の英国在住の個人的な友人にあて書かれる。『三重の結び目に三重のくさびを』すなわち『忠誠の誓い弁明』として出版され、題された最近の書について。英国カトリック教徒への教皇パウロ五世の二つの教書と主席司祭ジョージ・ブラックウェルへの枢機卿ベラルミーノの書簡に対して。そのなかで上記の誓いがカトリック教徒の良心に対して不法であることが示される。なぜならばその誓いにはカトリック教徒の宗教に反する様々な条項が含まれているから』である。このなかで『三重の結び目』とは表題にもあるように、パウロ五世の二つの教書とベラルミーノのブラックウェルへの書簡を意味している。ジェームズ一世が教皇教書と書簡を取り上げ批判しているので、パースンズもそれらを取り上げ、ジェームズ一世に反論するという方法をとっている。ジェームズ一世の『弁明』へのパースンズの反論は、上記の副題にもあるように、カトリック教に反する多くの条項を含んでいる「忠誠の誓い」が、カトリック教徒の良心にとっていかに不法であるかの立証である。その反論は、「忠誠の誓い」の内容吟味、パウロ五世の教書考察、及びベラルミーノの書簡検討の三点から成っているが、反論の根幹は、(1)「忠誠の誓い」はジェームズ一世が主張するように単に「市民としての服従」のみをカトリック教徒に要求しているだけなのか、(2)人は誰も「良心の自由」を有しているが、ジェームズ一世はこの「良心の自由」を侵害してまで「忠誠の誓い」をカトリック教徒に強要することはできるのか、である。それではいかにしてパースンズはジェームズ一世に反論しているのか。この問題に移る前にジェームズ一世の「忠誠の誓い」の要点について触れておこう。上記(1)について、ジェームズ一世は『弁明』のなかで幾度となく「忠誠の誓い」は市民としての王への服従のみ

を要求するものであることを強調する。

...this last made Oath [the Oath of Allegiance] containeth no such matter [as Catholic Religion], onely meddling with the civill obedience of Subjects to their Sovereigne, in meere temporall causes.⁽⁴⁾

ジェームズ一世は、『弁明』のなかで「忠誠の誓い」が市民としての王への服従に関わるだけでカトリック教には少しも触れていないことを繰り返し強調する。これは、パースンズの『判断』の後、1609年ジェームズ一世がパースンズへの反論としてヨーロッパの君主へ「忠誠の誓い」の正当性を訴えた『すべてのキリスト教君主、自由君主とキリスト教国家への警告』(*A Premonition to all Christian Monarches, Free Princes and States of Christendome*)でも変わることはない主張であった。ジェームズ一世からすれば、「忠誠の誓い」の目的は単に「市民として従順なカトリック教徒」と「強情な火薬爆発反逆者信奉者」を区別することである。しかし、「忠誠の誓い」が国内のカトリック教徒を最も悩ました点は、果たしてそれがジェームズ一世の主張するように単に「市民としての服従」のみを彼らに要求するのかということであった。「忠誠の誓い」は一見すると「市民としての服従」だけの世俗的な誓いのように見えるが、しかし、それにはカトリック教徒が無視できない次の一節が含まれていた。

And I doe further sweare, That I doe from my heart abhorre, detest and abjure as impious and Hereticall, this damnable doctrine and position, That Princes which be excommunicated or deprived by the *Pope*, may be deposed or murdered by their Subjects, or any other whatsoever.⁽⁵⁾

「私は、教皇によって破門され職を停止される君主はその臣民または他のいかなる人によっても廃位されまたは殺害されるというこの憎むべき教義と見解を不敬かつ異端として心から嫌悪し、憎み、取り消すことをさらに誓います。」というこの誓いには教皇の「破門権」「王廃位権」が扱われ、「忠誠の誓い」をたて

るカトリック教徒はそれらを「不敬」「異端」として否認しなければならない。それは教皇権の否認である。教皇の王廃位権をめぐり、「忠誠の誓い」は一層複雑な問題をカトリック教徒に投げかけることになる。教皇の王廃位権についてパースンズはいかなる見解を示しているのか。王は直接神からその権威を得るという王権神授説を否定したベラルミーノの矛盾を指摘したジェームズ一世に対してパースンズは次のように言う。

For in the first place Bellarmine's words are these : *Principatus saecularis. & c. Secular Princedom is instituted by man, & is of the law of Nations ; but Ecclesiasticall Princedome is only from God, and by divine law*, which he meaneth expresly of the first institution of those Principalities, or Governments: for that at the beginning God did not immediatly appoint these particuler and different forms of Temporall government, which now the world hath, some of Kings, some of Dukes, some of Commonwealthes, but appointed only, that there should be Government, leaving to e[a]ch nation to take or choose what they would. But the Ecclesiaticall Government by Bishops was ordained immediatly by Christ himselfe, for which cause Bellarmine saith in the second place heer alledged : *That Kingdomes are not immediatly instituted from God*, but mediately only by meanes of the people ; which people therefore may change their forms of government, as in many Countries we see that they have: but yet when any forme of Government is established, and Governours placed therin, their authority and power is from God, and to be obeyed out of Conscience, under paine of damnation, ...And he that will read but from his third Chapter *de Laicis* unto the 13. shall find store of assertions & proofes to that effect, to omitt many other places throughout his workes. So as the former proposition, *That Kings haue not their Authority nor office from God nor his law*, is very fraudulently sett down. For if he understand, that their forme of Principality and Office therin, is not immediatly from Gods institution, but by meanes of humane lawes, of succession, election, or the like; it is true. But if he meane, that their Authority is not from God either mediate, or immediate, or induceth not obligation of Conscience in obeying

them, as it seemeth he would have his Reader to thinke; it is most false.⁽⁶⁾

ここには教皇の王廃位権は直接述べられていないが、ジェズイットの王観が如実に説明され、王の廃位権も当然のことながらその裏に読み取れる。つまり、教皇は直接神からその権威を得るが、王は民衆を通してその権威を得るだけである。これは明らかにジェームズ一世の王権神授説否定で、王権は民衆からその権力を委譲されるというジェズイットの民権重視の考えである。この考えによれば王が民衆の意にそぐわない場合には民衆はいつでも王を廃位できることになる。ジェームズ一世の王権神授説とは真っ向から衝突する理論である。カトリック側にとって王権の神性否定と民権委譲による王権説主張はジェームズ一世の王権神授説論破と何よりもジェームズ一世廃位の格好の正当性をカトリック教徒に与えることになる。人間によって作られるものは人間によって廃止される。そして王廃位の正当性が認められればカトリック教徒は「忠誠の誓い」から解放される。ところがパースンズは教皇の王廃位権や王権の由来に関して詳細に論じようとはしない。なぜパースンズはそれらを深く論じようとしなかったのか。確かにパースンズは、ジェームズ一世への反論のなかでジェームズ一世が挙げた教皇の王廃位や殺害について触れているが、それらはただ「誇張」「拡大」「歪曲」「不誠実な取り扱い」であると言うだけで⁽⁷⁾、真っ向から教皇の王廃位権については論じない。又、教皇の俗事への介入に関してもベラルミーノの間接権力説にほんの少し触れて、次のように言うだけである。

...the Pope hath not Authority without just cause, to proceed against them [temporall Princes].... Our authority is limited by Justice. Directly also the Pope may be denied to have such authority against Princes, but indirectly only, *in ordine ad spiritualia*,...⁽⁸⁾

「教皇には世俗君主を訴える正当な理由のない権威はない。我々の権威は正義によって制限される。直接的にまた教皇は君主に対してそのような権威を有することを否定されるかもしれないが、間接的にだけ、つまり精神に関する事に関する秩序のなかで君主に対して権威を有するのである。」と述べるパースンズ

は、間接権力説を詳細に論じはしない。「忠誠の誓い」の中で最も物議を醸した「王廃位」「王殺し」「王と教皇の優劣争い」をパースンズは正面から取り上げることはしない。ただ、ジェームズ一世の「忠誠の誓い」の誤りを正すだけである。本来ならばパースンズは、教皇権力や王廃位権をジェームズ一世と同じく聖書、古代教父、宗教会議から反論すべきであったが、パースンズの書は大陸へ追放されたカトリック教徒が英国の友人へあてた書簡という形式を取っているためかただ友人に対して「忠誠の誓い」の誤った主張を指摘し、正しているだけである。「忠誠の誓い」論争の問題点を十分に知り尽くしていたはずのパースンズからすればこれはいささか物足りない印象を読者に与えかねない。

「忠誠の誓い」に関して教皇の王廃位権に論点が移るとジェームズ一世の主張はカトリック教徒に疑問を投ずることになる。カトリック教徒は、教皇の王廃位権否定が教皇権の否定に至り、それが自らの信仰と密接に関わってくると見なす。「忠誠の誓い」はジェームズ一世の言うごとく「単なる市民として誓い」をカトリック教徒に要求するのではなく、カトリック教徒としての信仰も問われる誓いとなってくる。このような看過しえない重要な問題点を含む「忠誠の誓い」に対してパースンズはいかに反論しているのか。最初にパースンズは、『弁明』を「忠誠の誓い」の内容、パウロ五世の二回の教書、最後に枢機卿ベラルミーノのブラックウェルへの書簡の順に見て、それに反論をしていく。「忠誠の誓い」内容に関しての最大の論点は、果たして教皇はジェームズ一世が言うように「市民としての服従」のみを要求する問題に干渉しているのかであった。ジェームズ一世は次のように「忠誠の誓い」の正当性を述べる。

For if he [the Pope] thinke himselfe my lawfull Judge, wherefore hath he condemned me unheard? And, if he have nothing to doe with me and my gouernment (as indeed he hath not) why doeth he *mittere falcem in alienam messem*, to meddle betweene me and my subjects, especially in matters that meerely and onely concerne civill obedience? ⁽⁹⁾

「忠誠の誓い」が「市民としての服従」に関わる内容の誓いであり、それゆえ教

皇は王と臣民との間に干渉することによって「他人の収穫に鎌を投げる」ことをしている。ジェームズ一世は、『弁明』のなかで再三「忠誠の誓い」が世俗的な性格を有し、臣民の君主への忠誠が魂の信仰と救済に反しているというパウロ五世の反論に触れる。

For how the profession of the natural Allegiance of Subjects to their Prince can be directly opposite to the faith and salvation of soules, is so farre beyond my simple reading in Divinitie, as I must thinke it a strange and new Assertion, to proceed out of the mouth of that pretended generall Pastor of all Christian soules.⁽¹⁰⁾

あるいは

And I ever held it for an infallible maxime in Divinitie, that temporall obedience to a temporall Magistrate, did nothing repugne to matters of faith or salvation of soules, as in this *Breve* [of Paul V] is alledged, was never before heard nor read of in the Christian Church.⁽¹¹⁾

世俗君主への世俗的服従は信仰問題や魂の救済には全く反していない。服従や忠誠の欠如が聖書で認められている例はなく、ジェームズ一世は終始「忠誠の誓い」の正当性を聖書、古代教父、宗教会議から主張し、カトリック教会側からの批判を退ける。さらに、ジェームズ一世は、「忠誠の誓い」は一千年前のトレド宗教会議特に第4回宗教会議で布告された忠誠の誓いの例にならい、神の声によって保証され、過去の宗教会議により認可されたと言う。

And that the world may yet farther see ours and the whole States setting downe of this Oath, did not proceed from any new invention of our owne, but as it is warranted by the word of God : so doeth it take the example from an Oath of Allegiance decreed a thousand yeeres agoe, which a famous Councell then, together with divers other Councils, were so farre from condemning (as the *Pope* now hath done this Oath) ...⁽¹²⁾

ジェームズ一世が主張するように「忠誠の誓い」が新しいものではなく、市民としての服従だけしか要求されていないのであればカトリック教側はこの論争に加わる必要はなかった。なのになぜ教皇はこの問題に干渉し、更にカトリック教徒に「忠誠の誓い」を禁止するまでに至ったのか。なぜ教皇は「他人の収獲に鎌」を入れたのか。答えは明白である。教皇は、「忠誠の誓い」が単に「市民としての誓い」とは見なさず、逆にそれがカトリック教の信仰と魂の救済に反していると考えたからである。「忠誓の誓い」は、いわばカトリック教会を真っ向から否定した誓いであるとカトリック教会側は考えたのである。パウロ五世は第一教書で明白に述べる。

...Such an Oath cannot be taken without hurting of the Catholike Faith and the salvation of your soules ; seeing it conteines many things which are flat contrary to Faith and salvation.⁽¹³⁾

パースンズの『判断』の副題がパウロ五世のこの見解に従っているのは明らかである。パースンズはパウロ五世の言葉に従って『判断』を書いているが、英国のカトリック教徒は王に市民として服従し、過去においても現在においても臣民は君主に誓いをたてているのである。

...I presume no Catholicke in *England*, will deny to sweare all civill obedience that he oweth to his Majesty, or that any subject hath ever in former Catholicke times sworne to their leige Lords or Princes, or do in other countries at this day.⁽¹⁴⁾

教皇ですら「市民としての服従」はカトリック教の信仰と魂の救済には反していないと言う。

...the Pope doth not prohibite naturall Obedience in things lawfull ; nor doth say, that such naturall, or civill Obedience is opposite to faith or salvation of soules; nor that the Oath is unlawfull, for exhibiting such naturall or civill Obedience :⁽¹⁵⁾

しかしながら、「忠誠の誓い」には俗事に関わる他にカトリック教と密接に関わる点があり、そのためにカトリック教徒は「忠誠の誓い」を受け入れることはできない。

...albeit divers partes therof were lawfull, to wit, all such clauses, as appertained to the promise of Civill and Temporall obedience : yet other things being interlaced and mixt therewith, which do detract from the spirituall Authoritie of their said highest Pastour (at leastwise indirectly) the whole Oath, as it lieth, was made therby unlawfull.⁽¹⁶⁾

「忠誠の誓い」の市民的・世俗的な側面は合法的であるが、誓いには教皇の霊的権力を損なう内容が混合されており、そのためにパースンズは、「忠誠の誓い」は不法と結論づけたのである。更にパースンズは教皇の言葉を受けて、「忠誠の誓い」には市民としてのカトリック教徒とカトリック教会に関わる点が述べられ、しかもそれが巧妙に組み合わせられているので、カトリック教に少なからざる侵害を及ぼしていると言う。

...in which[the Oath of Allegiance], both Civill and Ecclesiasticall points are couched, and conjoined craftily togeather, with no small prejudice of the said Catholicke Religion.⁽¹⁷⁾

パースンズの『判断』で立証しなければならないことはまさに上記の論点、即ち「忠誠の誓い」には「市民としての服従」以外にカトリック教に関わる点が歴然としてあるということであった。「忠誠の誓い」では、カトリック教はジェームズ一世が「彼の領土を支配する真なる王、正統な領主」であり、ジェームズ一世に対しては真なる忠実な臣民であることを認めるが、これに関しては異論がない。しかし問題は、カトリック教徒は更に次のようにカトリック教に反する点を誓わなければならないことである。

I must sweare in like manner somer pointes concerning the limtation of the Popes authority....what he cannot do towards his Majestie or his Successours in any case whatsoever.⁽¹⁸⁾

これは明らかにカトリック教の教義・信仰に触れており、教皇権の妥当性に関わる問題である。二番目の反論は教皇パウロ五世の教書のなかの教皇の言葉による。教皇は、「忠誠の誓い」をたてればカトリック教の信仰とカトリック教徒の健全な魂が傷つく、なぜならば「忠誠の誓い」にはカトリック教の信仰とカトリック教徒の健全な魂に反する多くの点が含まれているからであると言う。

...it ought to be cleere unto yow, by the wordes themselves, that such an Oath can not be taken without damage to the Catholicke faith, and health of your soules: for that it conteineth many things against the said Catholicke faith, and health of your soules.⁽¹⁹⁾

このようにパウロ五世は、カトリック教徒は「忠誠の誓い」をたてることができないことを明言する。パウロ五世の「忠誠の誓い」禁止の理由は最初の理由と同じである。第三の「忠誠の誓い」への反論は枢機卿ベラルミーノの「忠誠の誓い」への判断による。ベラルミーノは次のように言う。

No man can professe his Civill subjection, and detest treason and conspiracy...but he must be forced also to renounce the Primacy of the Sea Apostolicke.⁽²⁰⁾

ベラルミーノによれば「忠誠の誓い」には俗事と霊に関わる点、つまり市民としての服従と教皇権の否認の両方が同時に含まれている。ベラルミーノは、ジェームズ一世の「忠誠の誓い」をユリアヌス皇帝が皇帝旗のなかに自分の像と異教の神々を混合させたことと比較し、「忠誠の誓い」には合法的な事柄と非合法的な事柄が巧みに織りこまれていることを指摘し、カトリック教徒は「忠誠の誓い」をたてることはできないことを強く主張する。第四の反論として、パースンズはカトリック教徒の直面する問題解決のためにカトリック教徒に

ジェームズ一世への市民として及び世俗的な服従を提案する。しかし「忠誠の誓い」には教皇権に触れる箇所があるので良心の安全さを保ちながら「忠誠の誓い」をたてることはできない。

このようにパースنزは、「忠誠の誓い」の内容、パウロ五世の教書、ベラルミーノの見解からそれぞれ「忠誠の誓い」がいかにカトリック教徒にとって自己の宗教的信念と相入れない内容を含んでいるかを指摘し、カトリック教徒は「忠誠の誓い」をたてることはできないと述べる。市民としての服従、世俗的義務の容認をジェームズ一世に申し出てもそれが受け入れられなければ、「単なる市民としての服従」以上のものが「忠誠の誓い」では要求されているとパースنزと言う。確かにパースنزの言うごとく、「忠誠の誓い」には「市民としての服従」以外にカトリック教の根幹に触れる教皇権の否定という重要な項目が含まれていることは否定できない。国内にはジェームズ一世に忠実なカトリック教徒と教皇に忠実なカトリック教徒がおり、前者は身の安全を最優先に考え王に従ったが、後者の敬虔なカトリック教徒は「忠誠の誓い」を前に王を選ぶか教皇を選ぶか大いにその心を悩まされることになった。パースنزが『判断』を書いたのはそのようなカトリック教にジェームズ一世に対して「忠誠の誓い」をたてないことには正当な理由があるということを説き、逡巡するカトリック教徒に激励と勇気を与えるためであった。パースنزにとっては教皇廃位権はカトリック教の教義と深く絡み合っている問題で、それに触れる「忠誠の誓い」は良心の安全を保って誓うことはできないのである。

But for so much, as the Question of his [Pope's] Authority, what he might do, in certaine urgent cases, for the preservation of any Countrey, and for the universall good of Gods Church, is a matter belonging to doctrine & Religion, he cannot with safety of his Conscience sweare unto the Articles and branches of the *Oath* touching that point.⁽²¹⁾

パースنزが『判断』で終始ジェームズ一世の「忠誠の誓い」が教皇権の否定をカトリック教に強要していることを指摘する。パースنزが、「忠誠の誓い」

は「市民としての服従」のみをカトリック教徒に要求しているというジェームズ一世の主張を様々な角度から吟味し、どの観点からみてもカトリック教徒は「忠誠の誓い」をたてることは不可能だと言う。

パースنزの反論はこれだけで終わらない。パースنزは、教皇はたとえ世俗的な問題にしても直接的ではないが間接的に世俗的君主に干渉できるというベラルミーノの「教皇間接権力説」を持ち出してくる。

...the Pope hath not Authority without just cause, to proceed against them [temporall Princes] ...Our authority is limited by Justice. Directly also the Pope may be denied to haue such authority against Princes, but indirectly only, *in ordine ad spiritualia*, and when certaine great, important, & urgent cases, concerning Christian religion fall out betweene our Sovereigne, and the Sea Apostolicke; ⁽²²⁾

「正当な理由」がいかなる場合に正当であるかは議論の余地があろうが、間接的に、つまり、「精神の目的のために」ならば教皇は俗権を行使することができる。「精神の目的のために」という口実も教皇がいかにようにも解釈できる言葉である。本来、ジェズイットは教皇には俗権がないことを認めていたが、カトリック教徒の救済に危険が及ぶ場合には世俗的、精神的な存在である信者の生活に介入できると考えていた。「忠誠の誓い」の場合、たとえそれがジェームズ一世が主張するように市民としての俗事に関わる誓いであるから教皇はこの問題に関わる権利はないと言っても、教皇側はそうは考えない。たとえそれが俗事であっても、カトリック教徒の精神的霊的指導のために教皇は干渉できるのである。教皇間接権力説はカトリック教側にとっては非常に都合な説で、否定的に見れば教皇はカトリック教徒の精神的霊的指導を口実に世俗的・霊的事柄の区別なしにあらゆることに干渉できることになる。パースنزはこの教皇間接権力説をも利用して教皇の「忠誠の誓い」への干渉には正統性があると主張する。更にパースنزは神の摂理というより大きな観点から「忠誠の誓い」に反論する。パースنزは言う。一部カトリック教徒は「忠誠の誓い」に同意したが、教皇の直接・間接権を否定してまで同意したのではない。もし教皇権否定

を承知のうえで「忠誠の誓い」をたてたのであれば、それはカトリック神学者の一般的な同意に矛盾するし、神の摂理が不完全であったことを告白することになる。なぜならば神が「忠誠の誓い」という「大きな法外な悪」に対して何ら正当な救済策を残さなかったはずはないからである。パースンズは、教皇権—この場合「忠誠の誓い」への教皇の干渉—より広く言えばカトリック教は神の摂理である、と考えている。神の摂理に不完全はありえないから教皇権に不完全はありえない。つまり、教皇の「忠誠の誓い」への介入は不当な介入とは言えず、それは神の摂理であるという考えに至る。これはカトリック教のプロテスタントへの優位に基づくものであり、カトリック教以外は一切の宗教を認めないという見解に至る。カトリック教徒としてのパースンズの自負が見られる見解であるが、この傲慢ともいえる態度は第一部の最後でも見られ、そこでパースンズはカトリック教の英国国教会への歴史的な優位を「既得権」(*Ius acquisitum*)という点から強調している。

...the Catholicke Church hath *Ius acquisitum*, auncient right over Hereticks, as her due Subjects, for that by their Baptisme, they were made her Subjects, and left her afterward, and went out of her ; and she useth but her auncient manner of proceeding against them, as against all other of their kind and quality from the beginning.⁽²³⁾

しかし、英国国教会は歴史的にはカトリック教よりも新しいので、カトリック教に対して「既得権」を有することはありえない。

But the Protestant Church of *England* hath *Nullum Ius acquisitum* upon Catholics, that were in possession before them, for many hundred years, as is evident.⁽²⁴⁾

また、過去のカトリック教の時代にいかなる王によっても「忠誠の誓い」のような誓いがカトリック教徒に強要されたことはなかったし、いかなる現存する外国のカトリック君主によっても強要されていない。だからいかなる理由いかなる権利によっても英国カトリック教徒は彼らの良心に反して「忠誠の誓い」

を強要されたり、良心のために「忠誠の誓い」をたてることを拒否しても罰せられたり打たれたり殺されたりはできない。パースンズが言わんとすることは、英国国教徒は元来カトリック教徒であり、洗礼を受けた段階ですでにカトリック教会は彼らを「獲得」してしまっている。たとえ彼らがその後カトリック教会を離れようとも、カトリック教会は彼らに対して「既得権」があり、カトリック教会を離脱した英国国教徒がカトリック教徒を改宗させようとしてもその権利はないというのである。それ故、「忠誠の誓い」はカトリック教徒に教皇権を否定させるが、これはカトリック教徒にカトリック教を破棄することを意味する。しかし、カトリック教の「既得権」によりそれは不可能であるとパースンズは考える。「既得権」からの「忠誠の誓い」拒否はジェームズ一世では全く触れられていなかった。しかし、この「既得権」からの「忠誠の誓い」拒否は、上記の「摂理」と同様、プロテスタントのあらゆる主張を否定できるカトリック教にとっては非常に都合のよい論理であることは明白である。「既得権」は本来は法律用語であろうが、この論理によってカトリック教は自らに都合の悪いものには簡単に拒否でき、カトリック教の権力を保持できるのである。

パースンズは、これまで「忠誠の誓い」の内容、教皇パウロ五世の教書、及び枢機卿ベラルミーノの書簡、教皇間接権力、神の摂理から「忠誠の誓い」に反論してきたが、第一部の最後に至り更に「既得権」という論理を使用することによりジェームズ一世に更なる反論を試みる。パースンズの反論はこれで終わるのではない。彼は、カトリック教徒の「良心の自由」という点から「忠誠の誓い」に反論する。次に「良心の自由」と「忠誠の誓い」に論点を移したい。

2

パースンズが「良心の自由」を「忠誠の誓い」反対の理由としてあげたのはジェームズ一世が「忠誠の誓い」で「良心の自由」を「思いあがりの窮み」(height of pryde) と厳しく批判したからである。¹² しかし、果たしてカトリック教徒の「良心の自由」は彼らだけの主張であったのか。パースンズは、過去の歴史からプロテスタントの中にも「良心の自由」のために戦った人がいるのになぜカト

リック教徒がそれを主張すれば「思いあがりの窮み」と呼ばれるのか理解できない。

How, & with what reason, may he [King James] call it [the liberty of conscience] the *height of pryde* in English Catholicks, to have but hope therof, which is so ordinary a doctrine & practice of all his brethren in forraine nations, to witt, for us to expect liberty of Conscience, at the first entrance of our new King, of so noble, and royall a mynd before that tyme, as he was never knowne to be given to cruelty, or persecution in his former raigne? ⁽²⁵⁾

「思いあがりの窮み」という言葉はむしろ『弁明』を書いた（とパースンズが思っている）トマス・モートンとその信奉者に当てはまるのではないか。なぜなら彼らはエリザベス女王在任中ジェームズ一世にとっては旧敵であり、いつも説教、書物、演説で王に対して厳しい憎しみの態度を取っていたが、今は王から特別な愛顧を期待しているからである。パースンズの反論がどうあれ、王への服従を臣民に要求する絶対王政論者ジェームズ一世にとって「良心の自由」は簡単に容認できない危険な思想であったことを考えれば、「良心の自由」が「思いあがりの窮み」とであるという主張も理解できよう。なぜなら一度「良心の自由」を認めれば、臣民の心を王に結びつけておくことができず、各人が各々自己本位な行動を取り、王への服従もままならず、ジェームズ一世王朝の安定を維持できなくなってくるからである。絶対王政の打破を目指し、反王権神授説を唱えるジェズイットからすれば、個人が王に絶対服従する理由は見あたらない。逆に、王が民衆に従わねばならない。絶対権力と言えども侵害できない個人の「良心の自由」を盾に、パースンズは「忠誠の誓い」に異論を唱える。

では、パースンズはいかにして「良心の自由」から「忠誓の誓い」へ反論を試みているのか。パースンズによれば、良心の自由は神の法に最も適合しており、良心を奪ったり強制したりすることは人間に行使される最高の暴逆である。⁽²⁶⁾ 更に、パースンズは、「忠誠の誓い」がいかにカトリック教徒の良心を悩ませたかに触れ、「忠誠の誓い」がカトリック教徒に降りかかった「精神の最大

の苦悩」で、いかなる暴力も人々の良心への暴力に匹敵するものはないと言う。

I can assure yow, that it [the Oath of Allegiance] is the greatest affliction of mynd, among other pressures, that ever fell unto them. For that no violence, is like to that, which is laied upon mens Conscience; ⁽²⁷⁾

人は財産、名誉、地位、生命を失うことには耐えられるが、良心の圧迫には耐えることはできない。なぜならもし良心の圧迫に屈すれば、人は神を怒らし、自己の生命を失うことになるからである。良心は信仰の最後の砦で、信仰によらないものはすべて罪であると聖パウロは言ったが、良心によらないものはすべて罪であるとも言えよう。良心の自由はパースンズにとっては権利であり、誰によっても侵すことのできないものとなる。「良心の自由」は近代社会における個人主義の助長に一層の拍車をかけ、これ以後の「寛容精神」にも大きな影響を及ぼすことになる。ただ問題となるのは「良心の自由」には客観的な判断、尺度が存在しないということである。個人はすべて個人の判断で「良心の自由」を主張できる。これが極端に押し進められた場合、結果として何が生ずるかは明らかである。ジェームズ一世が何よりも恐れたのは「良心の自由」がもたらす無秩序、社会的混乱であったはずである。ジェームズ一世は「忠誠の誓い」が「正しい」と主張し、その「正しさ」をカトリック教徒個人に強制する。しかしそれは見方を変えれば個々人の「良心の自由」への侵害とも言える。個人が「良心の自由」を捨ててまでジェームズ一世に従う疑う余地のない正当性が「忠誠の誓い」にあれば状況は違ってくる。しかし、「忠誠の誓い」には問題点が多い。とすれば、個人は「忠誠の誓い」には従えず、「良心」に頼るしか取るべき道はない。絶対王権と「良心の自由」にはこのようなディレンマが絶えず付きまとっている。教皇の俗事介入に関して、教皇の「正当な理由」や「精神の目的のために」という口実が教皇に解釈次第でいかなる俗事介入も可能ならしめたのと同様、「良心の自由」もカトリック教徒が意のままに行使できる自由であった。個人が一人一人「良心の自由」を叫んだらどのような結果になるか。意のままに国家を、国民を操ろうとするジェームズ一世にとって、「良心の自

由」はどうしても容認できなくなってくる。時代の流れとしてはジェームズ一世が固執した絶対王政、王権神授説は市民の台頭に伴い、過去の遺物と化しつつあった。個人の良心を侵害し、左右することはもはや許されない時代となりつつあった。絶対社会と市民社会の対立の一つの表れが「良心の自由」であったわけであるが、ジェズイットのパースンズは過激な民権重視派として「良心の自由」を全面に打ち出し、ジェームズ一世の「忠誠の誓い」に反論する。教皇権の否定と教皇権の異端性を要求されるカトリック教徒にとって「良心の自由」は絶対権力への無言の、非暴力的な抵抗の最後の砦であった。無言の、非暴力的な抵抗の砦であるがゆえに、その力は一層根強く、不気味でもある。ならばこそジェームズ一世が「良心の自由」を「思い上がりの窮み」として退けようとしたのである。「良心とは、神が人間に植え付けた知識の光の以外の何ものでもない」とジェームズ一世は『王道論』(*Basilikon Doron*)で「良心」を定義し、「確かな知識に基づかない良心は無知なる空想か傲慢な虚栄である」と更に述べ、良心と知識の関係を強調した。⁽²⁸⁾ カトリック教徒の「良心の自由」を「思い上がりの窮み」と決めつけたジェームズ一世は、カトリック教徒の「忠誠の誓い」解釈を「確かな知識」に基づかない「たわごと」と見なしているのかもしれない。いずれにせよ、パースンズが「良心の自由」を盾に「忠誠の誓い」を拒否したことは、ジェームズ一世としても黙して済ませる問題ではなかった。

次に考えねばならないのは、良心に反する誓いである。パースンズはそのような誓いにはデメリットがあると言う。良心に反して誓いを強制される人に疑いがあった場合、誓いの後はさらに多くの疑いが生じ、そのような誓いは逆効果しかもたらさない。

...if there be any cause of doubt, of loyall good will in them, that are forced to sweare against their consciences: much more cause and reason may there be of like doubt, after they have sworne, then before. For that the grieve of their new wound of conscience remayning still within them, and stirring them to more aversion of hart, for the iniury receaved, must needs worke contrary effects to that which is pretended.⁽²⁹⁾

更に重要なことは、良心に反して誓いをたてる者はその誓いを破ることができることである。

And whosoever will not sticke to sweare against their conscience for feare, favour, or some other like passion, may be presumed, that he will as easily breake his *Oath*, after he hath sworne, upon like motives, if occasions do moove him.⁽³⁰⁾

そして、パースンズは、良心に反する誓いがいかに聖書で非難されているかについて触れる。

For it [swearing against conscience] is the highest degree of scandal active, so much condemned and detested in Scriptures, and so dreadfully threatned by our Saviour, to be severely punished in the life to come:⁽³¹⁾

聖書からの具体的な例としてバビロニアのネブカドネザル、エジプトのファラオ、シリアのアンチオコスが挙げられ、彼らの世俗的な服従には問題はなかったが、彼らが良心に反することを命令すると、人々はその命令に従わなかった。アンチオコスの場合は次のように述べられている。

The *Machabees* in like manner obeyed King *Antiochus* so long, as he commanded nothing against their Law and Conscience: but when he went about to force them to sacrifice, and to eate swynes-flesh, and other things against their Law and Conscience, they refused openly to performe that Obediences.⁽³²⁾

マカビー族は、彼らの法と良心に反しないかぎり王に従ったが、反する場合は王には従わなかった。これら三人の王はジェームズ一世によって引用され、ジェームズ一世は自分に有利に彼らを利用したが、逆にパースンズは同じ引用から自分に有利な箇所を引用する。当時の論争の一つの方法は一方が使用した資料を相手が有利に利用することであるが、この場合もジェームズ一世の挙げ

た三人の王の例が逆にパースンズによってジェームズ一世に不利になるように利用されている。古代教父の場合はどうか。彼らの場合も世俗的な市民に関する事柄においてはたとえ異端者、異教徒であろうが世俗君主には従順に従うが、神や宗教や良心に関わる問題においてはそうではない、と言う。例えばアウグスティヌスである。彼はユリアヌス皇帝に触れ、皇帝が偶像や犠牲をキリスト教兵士に崇拜させようとしたとき、彼らは皇帝よりも神を選んだ。しかし、皇帝が彼らに戦いに行き、他国を侵略するよう言ったとき彼らは皇帝に従った。彼らは「永遠の主」と「世俗的王」を区別していたのである。ジェームズ一世によって引用されているアウグスティヌス以外の古代教父達、テルトゥリアヌス、オプタトゥス、殉教者ユスティノス、アムブロシウスも皇帝への世俗的名誉・忠誠と神にのみ属する宗教と良心の名誉・忠誠とをはっきりと区別している。アムブロシウスは、カエサルのはカエサルに、神のものは神に与えた。彼が良心に反する誓いを強要されたいかなる行動を取ったかは明白であろう。パースンズは、古代教父を例に出し、良心や宗教に反する君主への服従が彼らから立証されることはないと言うのである。それでは宗教会議ではどうなのか。宗教会議は皇帝に服従したというがこれは真実なのか。パースンズは、ジェームズ一世によって言及されたフランス王シャルルマーニュ大帝と宗教会議を詳細に調べる。ジェームズ一世は宗教会議がシャルルマーニュ大帝に服従したというが、それはいかなる点においてであったのか。大帝が誓いを発したりしたことはなかった。なぜ宗教会議が大帝に従ったと言われたかといえ、大帝の命令で宗教会議が召集されたからである。しかし、実際は宗教会議への同意はローマ教皇からくるのが慣習であった。信仰に関する問題で認可を受けるために宗教会議は大帝に服従したのか。アルル宗教会議では司教の権威によってシャルルマーニュ大帝は様々な習慣を改善したかっただけなのであった。例えば、大帝とその子のために日々の祈りを励行するとか司教や司祭がより勤勉に勉強し、人々に教訓と説教で教えるとかである。アルル宗教会議では世俗的王国と支配権に関する問題で大帝の好意、権威、認可による以外は実行できない教会法とか法令があった。宗教会議は単に大帝の英知によりそれらを考慮してもらいたいために大帝に提示したのであって、信仰に

関する論争はそこでは一切触れられていなかったのである。この宗教会議で大帝が宗教問題で司教よりも上であるというのは正しくない。シャルルマーニュ大帝がジェームズ一世の「忠誠の誓い」のような誓いを発したら、司教達は世俗的忠誠を公言するがその信仰の関わる点には異議を唱えたであろうし、良心に反する誓いについては言うに及ばない。結局ジェームズ一世が主張するように宗教会議は良心に反する誓いを認めたことはなかった。

3

パースنزの『見解』には、「忠誠の誓い」論争の重要な問題点が扱われ、なぜ彼が「忠誠の誓い」を拒否しなければならなかったかが明快に述べられている。パースنزの反論は、(1)「忠誓の誓いでは教皇権が制限されている(2)教皇パウロ五世は「忠誓の誓い」を禁止した(3)枢機卿ベラルミーノは「忠誓の誓い」には霊的な事と世俗的なことが含まれており、「忠誓の誓い」を不法であると判断した(4)カトリック教徒は、「市民としての服従」に関する条項には誓いをたてたが、教皇権を疑う条項には触れず、従って「忠誠の誓い」には「市民としての服従」以上のことが要求されている、の四点から成っている。これをパースنزらは繰り返す論ずるが、それは「三重の結びに三重のくさびを」とジェームズ一世がタイトルをつけた『弁明』からくるものである。ジェームズ一世がパウロ五世の二つの教書とベラルミーノを取り上げて「忠誓の誓い」を擁護したのでパースنزらは同じ方法でジェームズ一世に反論しなければならならず、それが反復を避けられないものとしている。パースنزらの論点の新しさは、「既得権」と「良心の自由」を基に「忠誓の誓い」拒否を強調したことであり、教皇の廃位権や王殺しを直接取り上げて論じることにはしていない。それを論じなければ、パースنزらは王権の教皇権力への優位を容認することになる。カトリック教徒を「忠誠の誓い」から解放するためには教皇は王を廃位すればそれで十分であった。だからパースنزらは、教皇の王廃位権を何よりも論じるべきであった。ところが、パースنزらはそれを徹底的に行おうとはしない。パースنزが行ったことは、教皇教書とベラルミーノの書簡を取り上げて、彼らに沿う

形で「忠誓の誓い」の矛盾点を追求し、ジェームズ一世に反論を加えることなのである。パースンズの姿勢は根本的には教皇とベラルミーノの姿勢と同様である。ただパースンズが反論に使用したカトリック教会の「既得権」と「良心の自由」はそれまでには見られなかった論法であった。「忠誓の誓い」論争はいわば出口の見えない論争であった。一方が誓いの正当性を唱えても、他方はそれを不法として受け入れない。一方は絶対王政を死守し、他方は民権を重視し、絶対王権を否定する。両陣営はそもそも全く異なるイデオロギーに立脚しており、両者が妥協点を見いだすことは不可能であった。また、次の問題点をも「忠誓の誓い」は含んでいた。カトリック教徒は、王に対して忠実なイギリス人となると同時に、教皇に対しても忠実なカトリック教徒となりえることができるのかどうか。これはジェームズ一世側からすれば王朝存続に関わる大きな問題点であった。あるいは、カトリック教徒側からすれば、プロテスタントにもジェームズ一世王朝を脅かす者がいるのになぜカトリック教徒にだけ「忠誓の誓い」を課すのか。宗教と政治が微妙に絡み合っている「忠誓の誓い」において、カトリック教徒を説得せしめることは不可能であった。ジェームズ一世を選べばカトリック教徒は教皇を否認することになる。逆に教皇を選べば、ジェームズ一世を否定するに至る。いずれにせよイギリス国内の敬虔なカトリック教徒は苦渋の選択を迫られることになる。パースンズがあれほどまでに「忠誓の誓い」に対して反論したのは当然のことながらローマ・カトリック教会のためであったが、その反論の背後にはジェズイット・パースンズ特有の王権観があり、それは決して変わることはない。それが故に、「忠誓の誓い」論争においてもジェームズ一世、パースンズは一致点を見いだすことはできなかったのである。

パースンズに思うように反論されたジェームズ一世は臣下にパースンズへの反論を期待する。その最初の反論はバーロー (William Barlow) であり、さらにバーローの欠点を補ったのがジョン・ダン (John Donne) であったが、これらについては校を改めて論じたい。

注

- (1) この問題については, C. H. McIlwain (ed.): *The Political Works of James I* (New York: Russell & Russell, 1965), p. lix ff. W. K. Jordan : *The Development of Religious Toleration in England* (Mass.: Peter Smith, 1965), Vol. II . pp.76-83. R. C. Bald : *John Donne, A Life* (Oxford : Oxford Univ. Press, 1970), pp.215-8 等を参照。
- (2) 本書の英語タイトルは “THE IUDGMENT OF A CATHOLICKE ENGLISH-MAN, LIVING IN BANISHMENT FOR HIS RELIGION : Written to his private friend in England. *Concerning A Late Booke set forth, and entituled ; Triplici nodo, triplex cuneus, Or, An Apologie for the Oath of Allegiance. Against two Breves of Pope Pavlus V. to the Catholickes of England ; & a letter of Cardinall Bellarmine to M. George Blackwell Arch-priest. Wherin, the said Oath is shewed to be vnlawfull vnto a Catholicke Conscience; for so much, as it conteyneth sundry clauses repugnant to his Religion.*” である。本論では English Recusant Literature 1558-1640 Volume 82 *The Iudgment of a Catholicke English-man* (1608 ; rpt. New York: Scolar Press, 1972) を使用する。本論では『判断』と略記する。
- (3) ジェームズ一世の著作については上記 McIlwain 版を使用, 以下『弁明』と略記する。
- (4) McIlwain, p.86.
- (5) McIlwain, p.74.
- (6) Persons, pp.120-121.
- (7) Persons, p.99.
- (8) Persons, p.18.
- (9) McIlwain, p.72.
- (10) McIlwain, p.77.
- (11) McIlwain, p.79.
- (12) McIlwain, p.87.
- (13) McIlwain, p.74.
- (14) Persons, p.8.
- (15) Persons, p.50.
- (16) Persons, p.10.
- (17) Persons, p.13.

- (18) Persons, p.14.
- (19) Persons, pp.14-15.
- (20) Persons, p.15.
- (21) Persons, pp.16-17.
- (22) Persons, p.23.
- (23) Persons, p.23.
- (24) McIlwain, p.76.
- (25) Persons, p.39.
- (26) Persons, p.26.
- (27) Persons, p.20.
- (28) McIlwain, pp.16-17.
- (29) Persons, p.21.
- (30) Persons, p.21.
- (31) Persons, p.22.
- (32) Persons. p.52.